

国境世代にプレゼンする「日本再発見」

歴史の町並みを歩く



第53回

活気あふれる旧山陽道矢掛宿の町並み

米山淳一

はじめに

江戸時代、旧街道で規模の大きな宿場には参勤交代時などに諸藩の大名等が宿泊する施設があった。本陣とこれを補完する脇本陣である。藩主等や時には公家も宿泊した。令和時代の今でもその歴史を実感できる宿場町がある。本陣や脇本陣の建造物のどちらかが残っている町はあるが、本陣、脇本陣の両方がセットで残り、しかも保存されている宿場町となると知る限りでは2例しか見当たらない。いずれも岡山県。この連載第37回(通巻669)で訪れた旧因幡街道(姫路～鳥取)の大原宿、そして今回訪れた旧山陽道の矢掛宿である。旧山陽道は京都を起点に下関に向かう。いずれも江戸時代の宿場形態を良く残しており、平成初期には岡山県指定の町並み保存地区に指定されている。

矢掛宿は岡山県指定町並み保存地区から令和2年に国の重要伝統的建造物群保存地区に選定された。特筆すべきは旧矢掛本陣石井家住宅、旧矢掛脇本陣高草家住宅の両方が

国指定重要文化財に指定されていることだ。このような事例は、全国でも矢掛宿以外には見られないのである。東西約1kmにわたる矢掛宿では、本陣や脇本陣の建物が入母屋造や切妻造の町家群などとともに江戸時代の宿场景観を形成する貴重な存在となっている。

さらに矢掛町は、矢掛宿に住まうみなさんと力を合わせ宿場の保存を柱とした町の活性化に力を注ぎ、矢掛宿を文化観光資源として価値を高める新たなまちづくりの施策を実践している。まずは重伝建地区、そして電柱の地下埋設化、道の駅の設置等があげられる。その結果、矢掛宿は賑わいのある商業地として蘇ったのである。

立春を迎え、旅人気分で行く旧山陽道矢掛宿を訪ねた。

矢掛宿の入口はミステリアスな小路

日本海側の大雪で岡山駅を遅れて発車した新見駅行きの普通列車は、かつて快速マリンライナーに使用していた国鉄型の213系である。ずらりと並ぶロマンスシートに腰を



▶井原鉄道矢掛駅 和風の駅舎は重伝建地区に相応しい



矢掛宿に至る旧道の樺の大木と謎の句碑



◀小田川沿いに広がる旧山陽道 矢掛宿の町並みは美しい

▶町家裏手を流れる水路 かつて米などの運搬に使用された



の新道が左に折れる角の先に、お寺と冬枯れの大木の間に旧道らしき道が通じている。

寺は浄土真宗の専教寺である。くねるような臥龍松が目目をひく。道の反対側にある冬枯れの太木も存在感たっぷりだが、幹回りからして年代物の樺。その付け根に細い句碑が建っている。「初音きく宿場はすれに住居して 勇」とある。初音きくとはいったい誰か？ 名士か？ 遊女？ なんだか気になり、しばし足を止めた。

再び歩き出すと小さな水路に出た。水路は、焼き板塀となまこ壁脇の小道に沿って、緩く弧を描くように屋敷の裏手を廻っている。何気ないこの光景が気に入った。さらに



矢掛宿の保全に愛情を注ぐ西野主幹と渡邊主査
◀矢掛宿に至る小路は歴史的空間



東町・旧矢掛本陣界隈の町並みは整然と美しい 街並み環境整備事業でも景観を整備



重厚な造りの旧問屋はビジターセンターとして再生 内部はお座敷やお庭などが整備された

進むと焼き板塀に挟まれた小路が目に入った。杉板を焦がした焼き板塀と石畳からなる小路は、実に品格があり美しい。歴史的空間との遭遇である。小路は寺の名に由来して専教寺小路と名付けられている。この先が山陽道の矢掛宿に違いない。広い都市計画道路、寺、冬枯れの木、謎の句碑、水路そして味わい深い専教寺小路、矢掛宿への道行きはとても贅沢なのである。

美しい焼き板塀に囲まれた専教寺小路をゆっくりとたどる。意外と距離がある。町家と町家の間を抜けているのだ。視界が開けるとそこは旧山陽道の矢掛宿だった。振り返ると右手が矢掛ビジターセンター問屋、左手が宿泊施設である。両方とも漆喰を塗り籠めた重厚な入母屋造の伝統的町家である。専教寺小路が長いのは、町家の奥行きが約24間(約43m)もあるからだ。町家の街道側の正面は約3~4間ほどである。

迫力満点の矢掛宿

旧山陽道の矢掛宿は、東西に長く約1km。街道には宿場関連の建物が息づいている。東の京都市から西の下関方に向けて東町、中町、西町の順に並び、現在、地元では親しみを込めて「本陣通り」と呼んでいる。

さて、専教寺小路を抜けた境界は東町である。街道に立ち東西を見渡すと、ほぼ一直線に伝統的町家がずらりと並



生活感溢れるまち中に5棟の入母屋造りが並び

んでいる。すごい迫力である。看板、車、自販機などを圧倒するほどのボリュームで歴史的景観が展開する。これが矢掛宿のダイナミズムでもある。

まずビジターセンターを訪ねた。江戸時代の問屋(荷継場等)で、入母屋造、妻入りの重厚な二階建ての町家である。厨子二階の木瓜模様の窓、本瓦葺きの屋根や下屋が印象的である。そして、御影の切り石積の上に建てられているので街道より高く、一層迫力を感じる。近年、矢掛町が取得し修理後、ビジターセンターとして公開している。町



目をひく洋風建築の交譲会館は住民の交流の場

の歴史や文化の展示のほか、整備されたお座敷やお庭などを楽しめ、魅了される施設である。

矢掛宿名物の「大名行列」を紹介したビデオ映像が興味深かった。50年の歴史がある「大名行列」のきっかけは、昭和51年の小田川大水害であった。水害で壊滅した宿場町のみなさんを勇気づけようと立ち上がったのは、地元の商工会青年部。旧山陽道屈指の矢掛宿の歴史と文化を礎に「大名行列」を始めた。お祭り好きの地元のみなさんがさまざまな役を演じ、大名行列を成功に導いた。今や毎年恒例行事として町に賑わいと誇りをもたらしている。まさにプライド・オブ・プレイス。そしてそのエネルギーが新たな矢掛宿の歴史を生かしたまちづくりへと結びついているのである。

ビジターセンターを後に、宿場の東側に向けて歩き始めた。すぐに旧矢掛脇本陣高草家住宅である。町家とは違ってお屋敷のような大きな建物。間口は17間(約31m)、大地主であり金融業なども手掛けた豪商。脇本陣の指定は江戸末期。昭和61年には建物の解体修理を行い、当時の姿を取り戻している。脇本陣とお隣の町家との間に人がやっと通れ



る狭い小路がある。なまこ壁に挟まれた大高草家小路は、なんとも心地良い空間である。

さて、宿場の遺産を探しているとお堂を発見。意外にもその奥には可愛らしい洋風建築が佇んでいる。「交譲会館」(昭和3年)である。伝統的町並みの中で異彩を放つ愛らしい建物である。設計者は江川三郎八で、岡山県内に多くの近代建築を残している。連載第51回(通巻698)、津山城西の町並みで訪ねた旧土居銀行津山支店(現作州市民芸館)も江川作品。さらに進むと写真屋さんの脇に一里塚の標柱を見つけた、建物だけではなく、旧山陽道の痕跡に出会い嬉しくなった。

矢掛宿は、賑わいのある商店街

脇本陣の辺りから西町方面を眺めた。奥の山並みが霞んで見える。なんと雪が降ってきた。急いで東町から本陣のある中町に向かった。入母屋造、妻入りの町家が5軒並ぶビューポイントで撮影していると雪が風に舞い始め、吹雪になった。何だかわびしくなってきたが、この境界の町家の多くは商売屋、人が行き交っているから活気がある。これ



看板建築の新聞店はよく見ると伝統的な町家で奥が長い



老舗の和菓子屋で郷土の味を楽しめる



小田川の船着き場に通じる塩屋小路 玉島からの塩の道



柚餅子は天璋院篤姫も食したと言う

▶宿場外れの西町の情景は哀愁を誘う

◀市民の誇り 旧矢掛宿本陣石井家住宅の品格ある屋敷構え



な斜面を登るつづら折りの山道を車で登ると広場に出た。矢掛宿が一望でき、遠くの山々まで見える。昨日、下見のうえ場所を確認したとの西野さんの言葉に思わず頭が下がった。おかげでシャッターをきりまくった。感謝である。撮影後、町家交流館に戻りお話を伺った。西野さんは、なんと先ほど触れた福岡県吉井町のお隣、田主丸町出身で、嫁いで矢掛町民になった。矢掛町が大好き、それは規模も街の様子もふるさとに近い吉井の町並みに似ているからだとか。

奥深く、959坪と矢掛宿で一番大きな町家である。西国大名等の宿泊地であり、天璋院篤姫や毛利敬親らが宿泊したことが文献でわかっているという。賓客は、奥の上段の間を使用した。小田川に沿った、嵐山を借景としたお庭が長旅の疲れを癒してくれたことだろう。かつて石井家は酒造業を営んでいた。主屋の裏手には立派な米蔵、醸造蔵、釜場、絞場などが現存し、今もその面影をしのぶことが出来る。

趣深い西町の町並み

中町と西町の境は、備中高梁方面の北へ延びる松山街道が分かれる辺りで、モダンな看板建築の精肉店が目印である。このあたりに来ると町の様子に変化していることに気づく。建物ではない、空が狭いのだ。電柱や電線がやたらと目につくのである。

電柱の地下埋設区間は、脇本陣のあった東町から本陣のある中町境界が中心で、西町は未施工区間なのだ。道幅も狭くなっているからなおさらそれを感じる。それでも、町並みが変化に富んでいる箇所がある。町家の一部が街道に雁行するように連なって建っているのだ。空中からだとなコギリの刃のような形状に見えるだろう。この辺りだけ古代条里制に基づく地割が残っている証なのである。また、西町の街道は緩やかな坂で、左に弧を描いて川堤に上がり栄橋に至る。町外れを連想させるその渋い空間構成にたまらない魅力を感じるのである。町外れ、いや宿場外れの美学とも言えるだろうか。

ちょっぴり感傷的な気分には浸っていると西野さんがやって来て、ぜひ会わせたい方がいると言う。だいたいお約束の時間に遅れてしまったようで、慌てて確認のお電話。

坂の途中の駐車場で会ったのは、佐伯健次郎さん。



嵐山を借景とした瀟洒なお庭



賓客が使用した上段の間 ぶどうにリスの欄間や名産の綿花の襖絵を堪能



邸内の土蔵のなまこ壁と精緻な石積みにも品格を感じる

を見て一気に我に返った。重伝建地区の矢掛宿は商店街でもあるのだ。

各地の重伝建地区を訪ねると空き家が多く、商店もないなどの事例は多くあるし、実際に出会ってきた。矢掛宿はこのような町とは違い、重伝建地区が商店街として生き続けている。しかも来訪者相手の食べ物店やお土産店だけではなく、地域の生活に根差した商店が多いことも特徴である。醤油、精肉、新聞、文具、和菓子、花、銀行、趣味のプラ模型屋まで60を超える。もちろん、地元民が愛する食堂や居酒屋もある。町としてちゃんと機能しているのだ。そこで思い出したのが重伝建地区の筑後吉井の町並み（福岡県うきは市）だ。豊後街道沿いに矢掛宿と同じような漆

喰で塗り籠めた入母屋造や切妻造の町家が並び、これらが地元御用達の商店になっている。矢掛宿とよく似ているし先進事例と言えるのではないかと。

さて、矢掛町教育課の西野望さん(矢掛町文化財係主幹)と町家交流館でお会いする時間だ。今回の取材に際し、資料提供ははじめ多くのご教示を賜った。ガラス戸を引くと笑顔で迎えてくれた。先輩の渡邊倫江さん(文化財係主査)もご一緒。ご挨拶の後「天気心配、嵐山公園に急ぎましょう」と裏の駐車場に向かった。矢掛宿を俯瞰撮影したいという僕のリクエストに応じて、車でご案内して下さるのである。嵐山公園は、矢掛宿の南側を流れる小田川の対岸の山の上にある桜の名所で、町のみなさんの花見の場。急



街道に雁行して並ぶ伝統的町家群 赤いポストは現役



▲住民のイベント広場は地域の防災拠点でもある ▶住民が楽しめる町でなければ発展しないと佐伯健次郎さんは元気いっぱい



瀬戸内の香り漂う「待鳥」の料理 右手前からメゴチ南蛮、なまこ酢、かぶら煮

西町で文具店を営むかたわら、一般社団法人やかけまるごと商店街振興会の代表理事で、賑やかな矢掛宿商店街を仕切る重鎮である。

隠れ家のようなお部屋で、まちづくりに関してお話を伺う機会に恵まれた。実は、矢掛宿の重伝建地区に向けた住民の合意形成や電柱の地下埋設事業(無電柱化)など町の活性化に関する様々な取り組みにも佐伯さんら商店街振興会が後押ししている。

「美しい町並みになれば地域住民の家に対する意識も高くなる。商店主ではなく、住んでいる人が良い町と感じる町を目指したい」と笑顔である。

そして「面白いところにご案内したい」と、街道に出て向かった場所は、例の町家が雁行して連なる界限だった。佐伯さんが町家の引き戸を開けて奥へ進むと、目の前に広場が現れた。西町の町並みからは想像もつかない広大な敷地が目のまえに展開する。びっくりである。文化庁の補助で設けた防災拠点とか。住民のイベント広場でもあり、定期的に市なども開催しているし、お祭りの会場にもなっていると佐伯さんは嬉しそうだ。

よく見ると町家は新築である。それが伝統的町家と同じ

ようなデザインで軒を並べるように雁行して建ち、町並み景観はすこぶる良好だ。この場所は大火で焼失した町家群等の跡地だった。まさに「災い転じて福となす」である。またまた、住民が主役となる矢掛宿の仕掛けを実感した瞬間である。

夕闇が近づき、みなさんにお礼を申して西町をあとにした。今宵の一献、佐伯さん一押しの居酒屋「待鳥」に行くのだ。有名ブランド店の隣に間口2間ほどの構え。戸を引いてカウンターの端へ。カウンターの上席は常連らしくすでに杯や箸がセットされている。よそ者は控えるが仁義だ。大将が黙々と手を動かしている。女将さんが突き出しと言って手にしてきたのは、瀬戸内のメゴチの南蛮。嘯むごとに旨味が沁みわたる。これにお隣鴨方の地酒「喜平」の純米熟爛がピタリ。思わず「旨い」と声を上げた。

その後も瀬戸内のなまこ酢や寄島産牡蠣のフライ、小エビのだし汁で炊いた地物の蕪と続く。常連が集い始め店は活気に包まれた。「居酒屋のない町は駄目」と、重伝建地区白山市白峰の山口さんの名言を思い出した。

そして、「賑わいの商店街がない町も駄目」と、矢掛宿で学んだのである。(地域遺産プロデューサー)